神秘学ポエジー 風遊戯

photopos 111

【神秘学ポエジー〜風遊戯 第 222集】 photo ヴァージョン

photopos 2751-2775

《2022.3.20〜 2022.4.13》

神秘学遊戯団

☆photopos-2751　　2022.3.20

※愛媛県総合運動公園にて

わたしには
たくさんの限界がある

それらの限界が
わたしの限界であるならば

そしてわたしがわたしを
超えてゆこうとするならば

わたしはわたしの限界を
ひろげてゆかねばならない

言葉が限界ならば
言葉をひろげ

論理が限界ならば
論理をひろげ

思考が限界ならば
思考をひろげ

感情が限界ならば
感情をひろげ

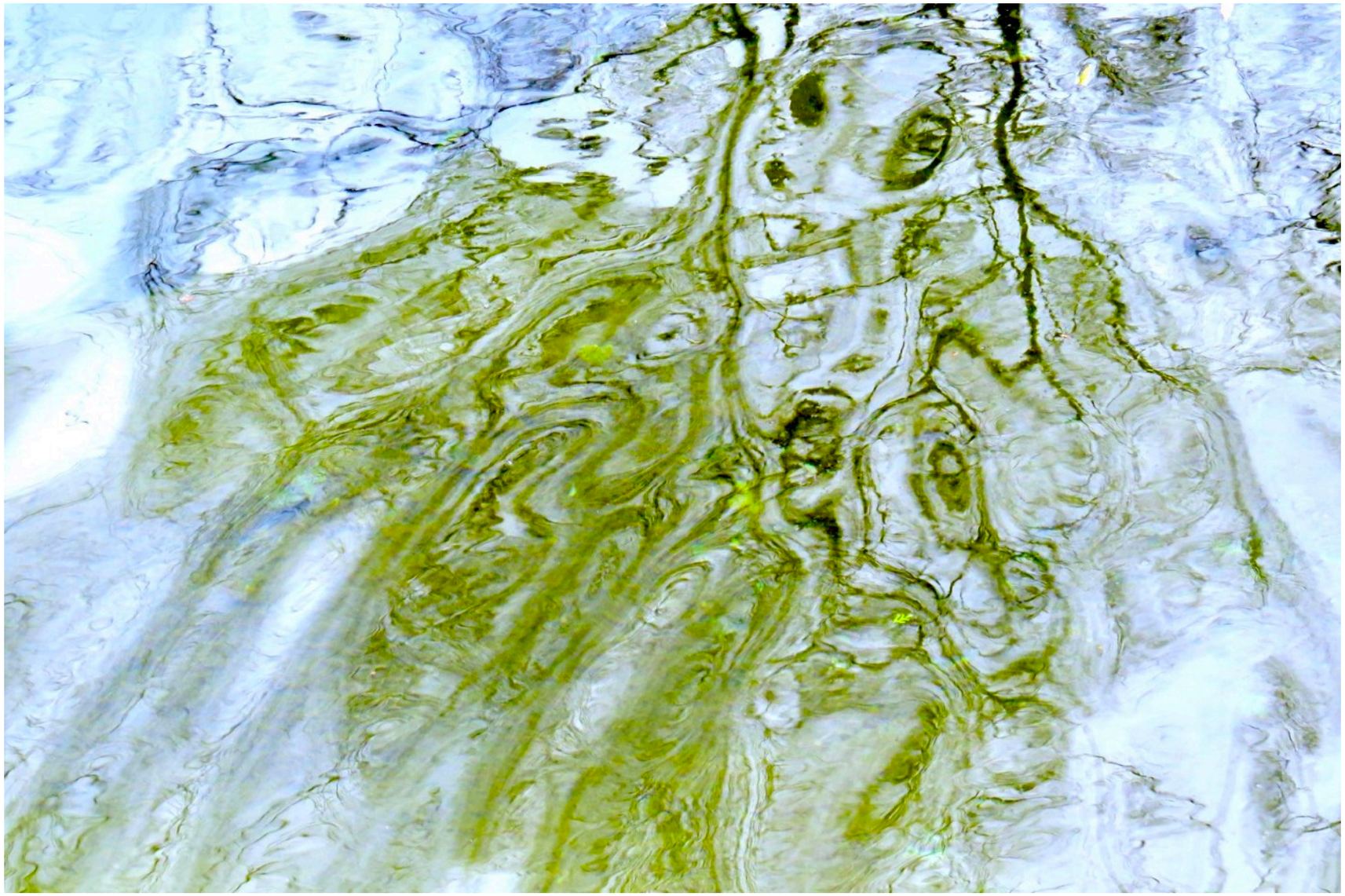
感覚が限界ならば
感覚をひろげ

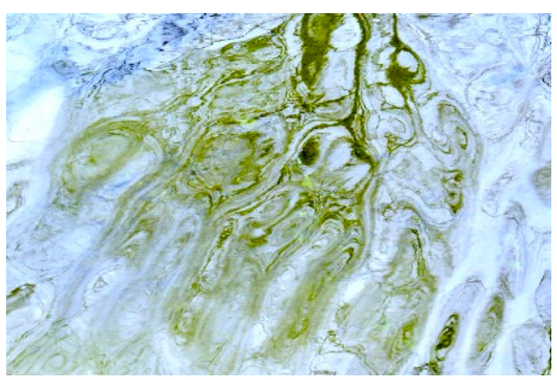
意志が限界ならば
意志をひろげてゆく

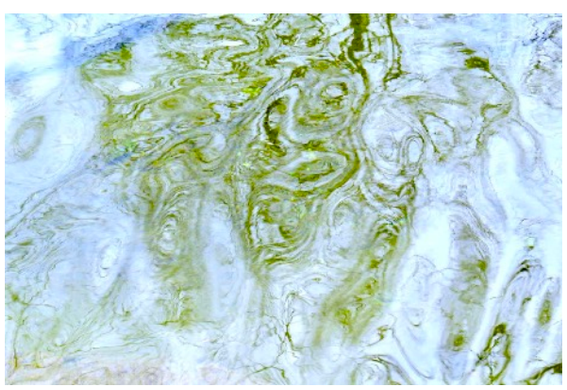
それらの限界のすべてが
いまのわたしの世界の限界になるから

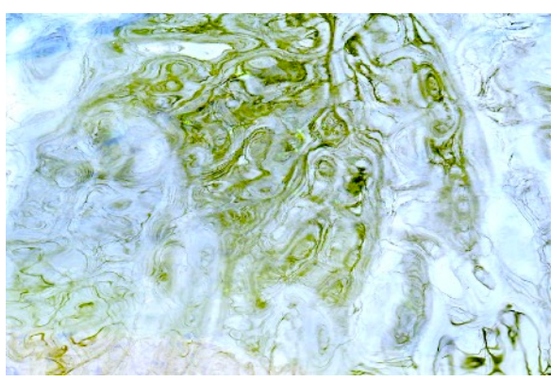
わたしがわたしを超えてゆくために
わたしの世界の限界がどこにあるのか
そのことに気づくところからはじめる

☆photopos-2752　　2022.3.21









※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

与えられたものは
与えられたものにすぎない

じぶんでじぶんに
与えたものではないから

それでじぶんを
つくることはできない

じぶんでじぶんに
与えたものだけが
あらたなじぶんをつくる

教えられたことは
教えられたことにすぎない

じぶんで問いかけ
考えたことではないから

それをじぶんの
考えにすることはできない

じぶんでじぶんに
問いかけ考えたことだけが
じぶんを深める考えになる

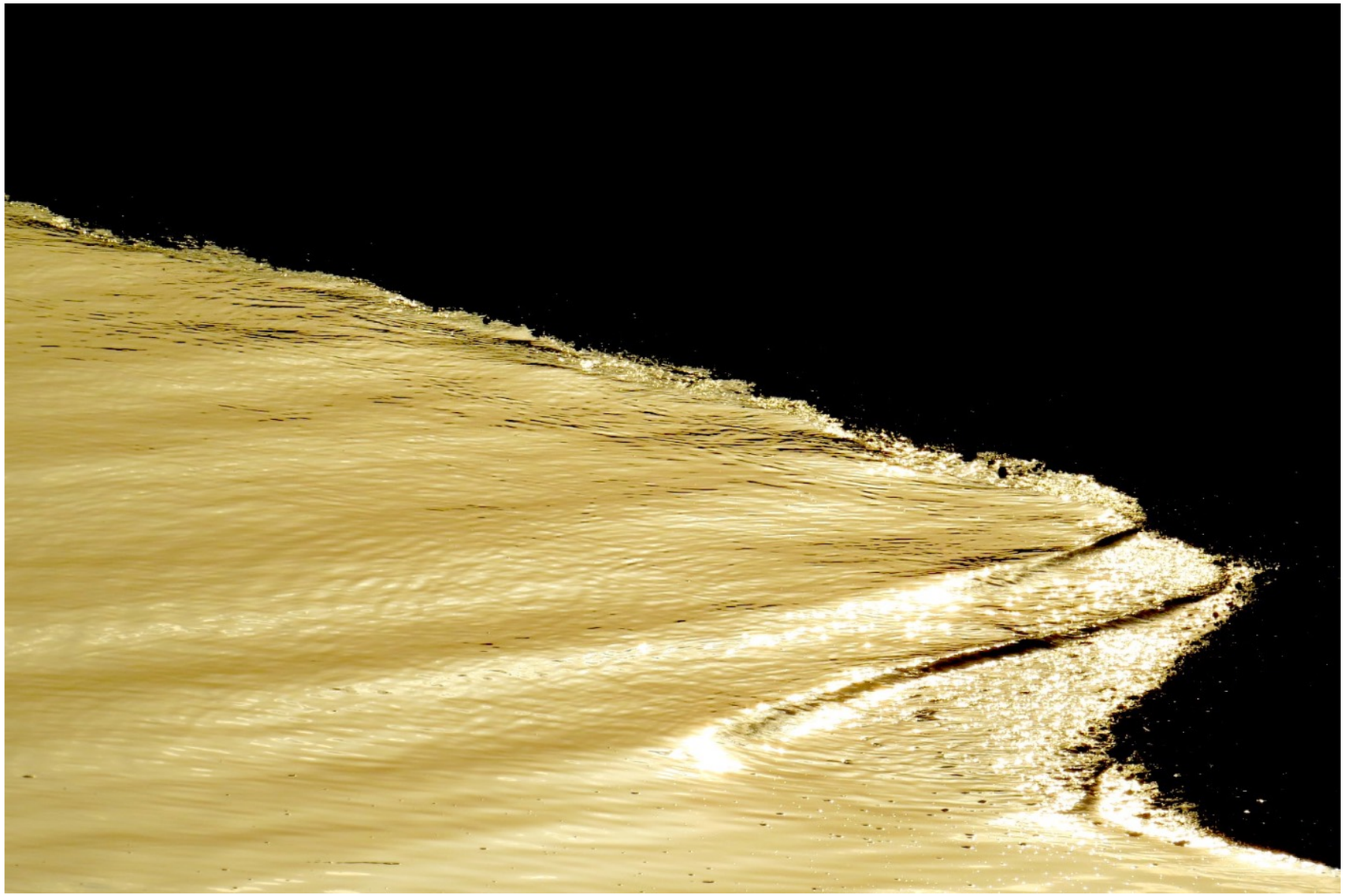
ひとがつくった正しさは
ひとの正しさにすぎない

じぶんなりに吟味した
正しさではないから

それをじぶんの
正しさにすることはできない

じぶんでじぶんを吟味し
そこで考え抜かれた正しさだけが
じぶんを鍛える正しさになる

☆photopos-2753　　2022.3.22



※愛媛県松山市・重信川河口にて

寄せては
返し
寄せては
返す
波のように

すべては
寄せては
返し
寄せては
返しながら

そのリズムのなかで
かたちが生まれてゆく

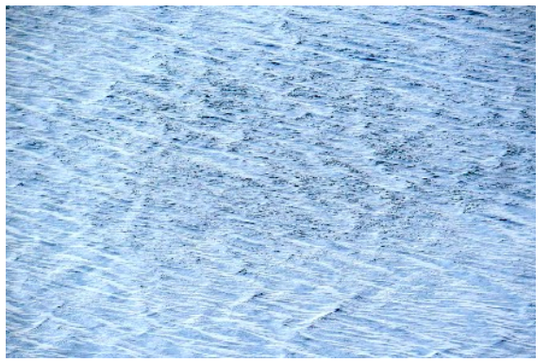
すべてのいのち
すべてのこころも
寄せては
返すリズムのなかで

ときに静かに
ときに荒々しく
歌い叫びながら
それぞれのかたちを
奏でている

始まりが
終わりとなり
終わりがまた
始まりとなり
いつ始まり
いつ終わるのか

寄せては
返し
寄せては
返す
リズムのなかに
始まりと終わりを結んで

☆photopos-2754　　2022.3.23



※愛媛県松山市・重信川河口にて

われは
おのずから
なるものの
われであり

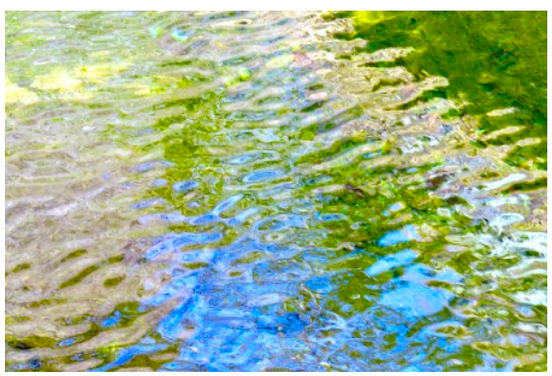
みずから
なすものの
われであり

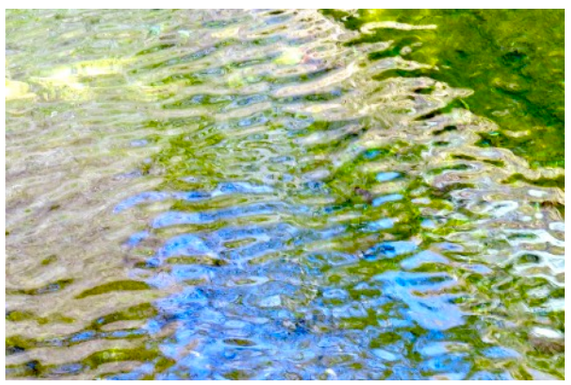
おのずから
なるわれは
みずから
なすわれへと
はたらき

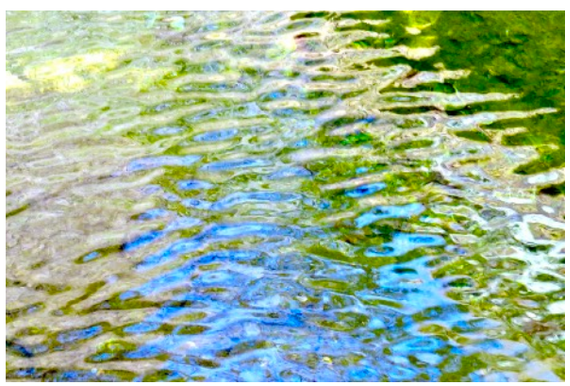
みずから
なすわれもまた
おのずから
なるわれへと
はたらき

たがいに
おりなし
おりなされ
われは
われなきわれ
とともに
あらたなわれとなり

☆photopos-2755　　2022.3.24







※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

かたちの
なかに
みえない
かたち

みえない
かたちは
みえますか

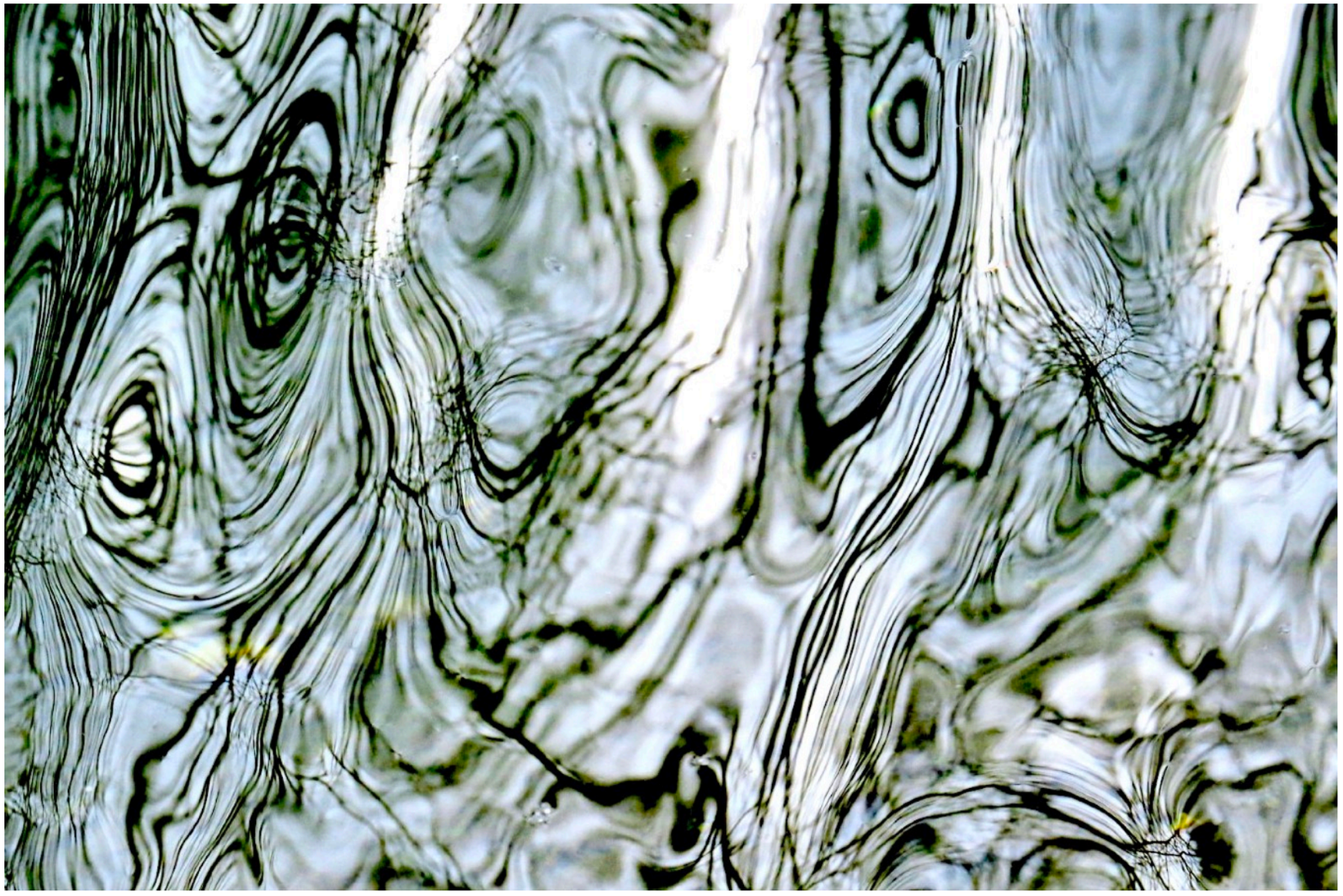
こころの
なかに
みえない
こころ

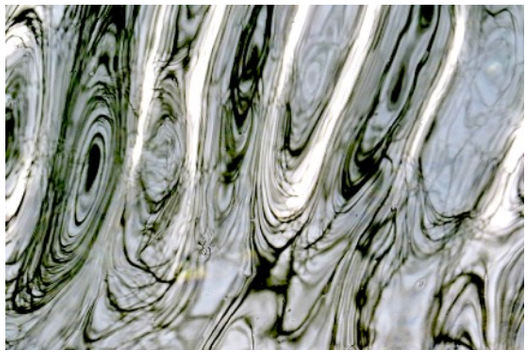
みえない
こころは
みえますか

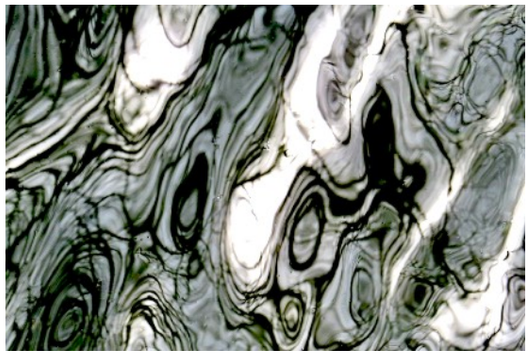
わたしの
なかに
みえない
わたし

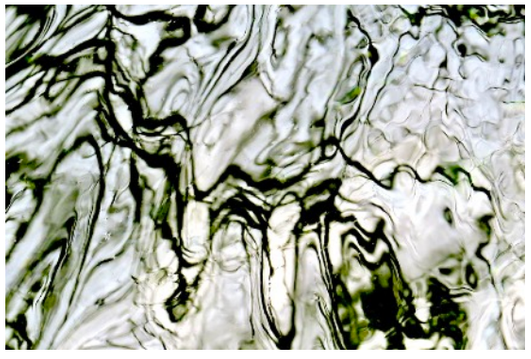
みえない
わたしは
みえますか

☆photopos-2756　　2022.3.25









※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

指さされた月を見て
それが月だと思っても
月は半分だけしか
顔を見せてはくれないように

教えられたことを知り
それを確かだと思っても
教えられないことは
知ることができないままだ

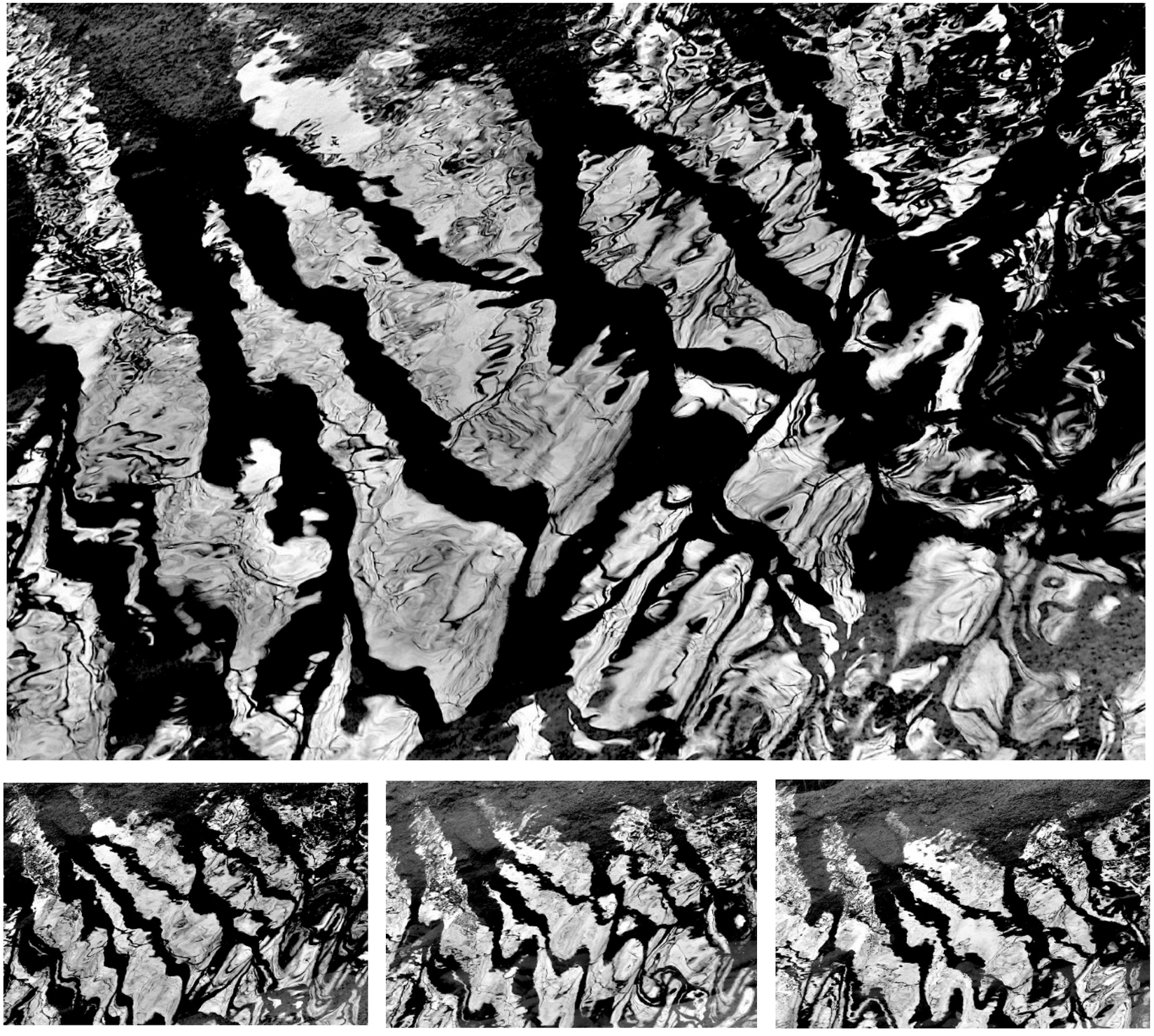
ひとは知りたいことだけ
知りたいように知りたがり
見たいものだけ
見たいように見たがるから

世界はいつまでも
マトリックスの世界のように
そこにはない現実として
生きられるばかりになる

リアルはいつも
教えられた顔にではなく
ヴェールの向こうに
隠されている顔にある

じぶんそのものもまた
思いこんでいるじぶんではなく
その奥に知らず隠されている
じぶんであるように

☆photopos-2757　　2022.3.26



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

あるから
ない
ないから
ある

たがいに
あいては
見えないけれど

あると
ないとは
ふたつでひとつ

するから
しない
しないから
する

たがいに
あいては
見えないけれど

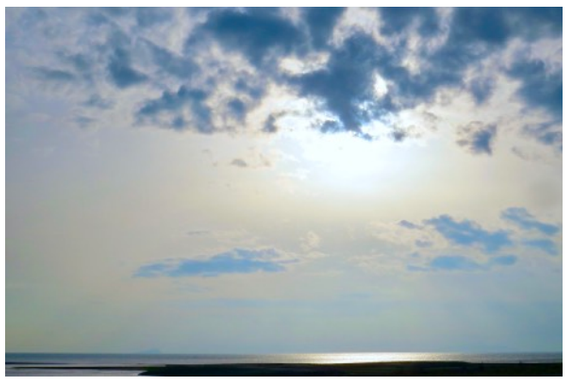
すると
しないは
ふたつでひとつ

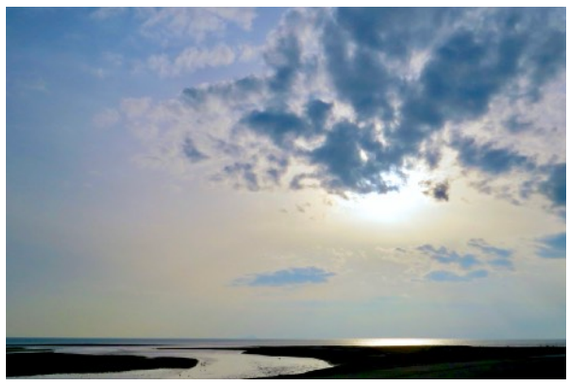
生きるから
死ぬ
死ぬから
生きる

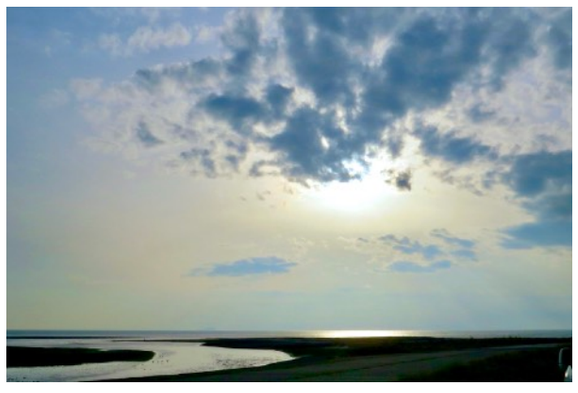
たがいに
あいては
見えないけれど

生きると
死ぬとは
ふたつでひとつ

☆photopos-2758　　2022.3.27







※愛媛県松山市・重信川河口にて

沈黙の果て
祈りのように
内なる扉から
光は訪れる

光は教えない
ただ見えない
わたしを照らすから

内なる扉を
ひらくため
目を閉じ
そして闇のなかで

目覚めるのだ
言葉はむしろ
閉ざすから

沈黙のなかで
光が生まれるのを
花のひらくのを
秘やかに待つように

祈るのだ
世界の謎がみずからを
ひらきはじめる
そのときまで

☆photopos-2759　　2022.3.28

※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

わたしが
みんなになるとき
わたしは
なにかを失う

わたしは
みんなが見ているもの
みんなが考えていることを
じぶんのそれにしてしまうから

はじめのうちは
すこしばかり違っていることがあっても
違うということが
不安と恐れになるために
違いをどこかに捨ててしまうのだ

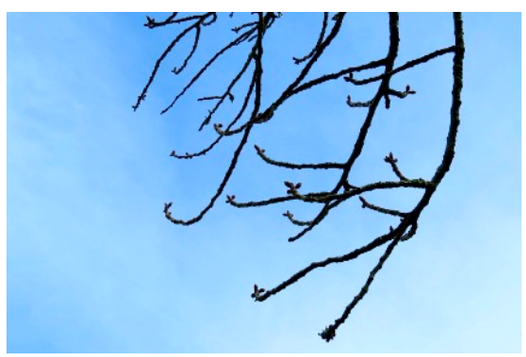
みんなで見れば
みんなで考えれば
怖くなんかない

そして
わたしは
わたしを失うことで
安心と安全と平和を得る
みんなこそが
わたしだからだ

みんなが見てくれる
みんなが考えてくれる

そうしてわたしは
ひとつひとつ
わたしでしかない
なにかを失くしてゆく

☆photopos-2760　　2022.3.29



花なき
心に
花は咲き

心なき
姿に
心は宿り

姿なき
形に
姿は現れ

形なき
風に
形は遊び

風なき
光に
風は舞い

光なき
名に
光は語り

名なき
花に
名は秘され

※愛媛県総合運動公園にて

☆photopos-2761　　2022.3.30

少しずつ
少しずつ
水が蓄えられ

それが
やがて溢れ
流れ落ちるように

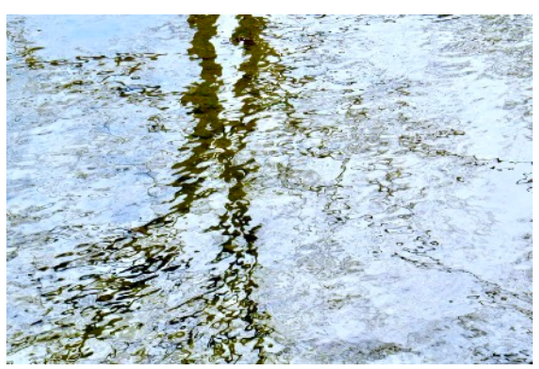
私は
待たねばならない

私のなかに
少しずつ
少しずつ
蓄えられる
沈黙の滴が

光の如く
集まり
やがて溢れ
言葉となって
流れ落ちるときまで

※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

☆photopos-2762　　2022.3.31



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

ひとりと
ひとりは
ひとつにならない
ふたりだ

ひとりと
ひとりだから
ふたりで
ともにいられる

みんなは
ほんとうは
みんなじゃないのに
ひとつになろうとする

わたしのなかにも
みんなはいるけれど
みんなとひとつにはなれない
わたしはひとりだ

ひとりだから
あなたというひとりと
どこまでも
ともに歩いていける

☆photopos-2763　　2022.4.1

※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

世界は
ひとつじゃない

ひとりのなかにさえ
たくさんの世界があるから

世界と世界のあいだを
自由に泳げるような

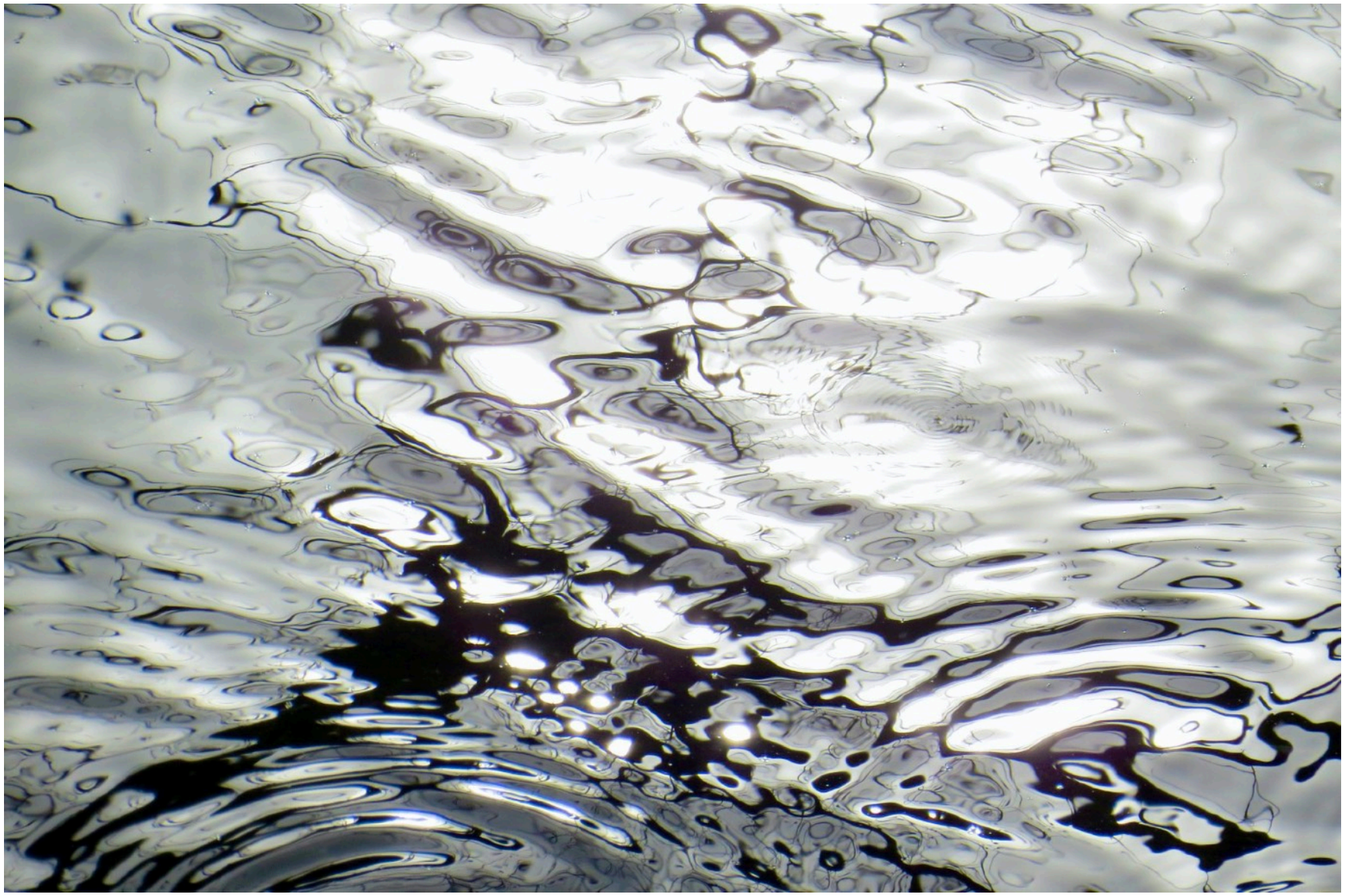
ひらかれた目と耳
しなやかな手と足
たくましい心をもつことだ

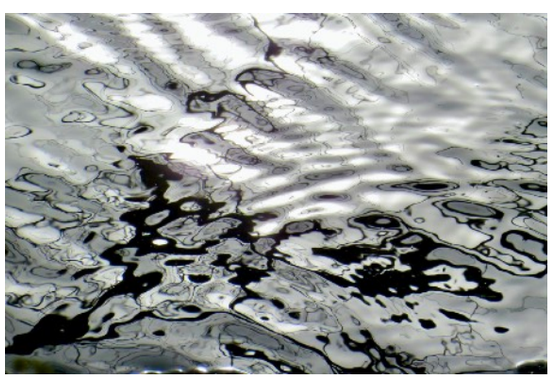
自由とは
ひらかれながら
むすぶことだから

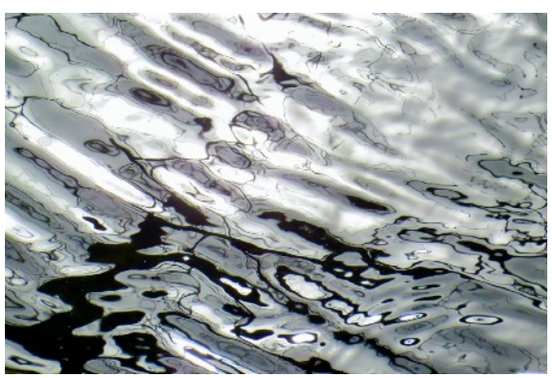
ひとつの世界だけに
閉じ込められそうなときは
別の世界へと遊ぶのだ

世界をひとつにしないで
世界と世界のあいだで
自在にメタモルフォーゼできるように

☆photopos-2764　　2022.4.2







※愛媛県総合運動公園にて

存在は
見えないけれど
ある

存在を知るために
言葉はある

わたしたちは
言葉によって
存在を知る

言葉に映された
存在を垣間見る

そのように
存在者は
言葉のように

わたしたちのまえに
現れているけれど
ほんとうに
見えているのだろうか

わたしも
そしてあなたも
ほんとうは
見えない存在なのだが

見えている
わたし
見えている
あなたがいて

わたしからあなたへ
あなたからわたしへ
渡される言葉があって

存在は
知られ詠われ
開示されはじめる

☆photopos-2765　　2022.4.3

※愛媛県松山市・重信川河口にて

飛翔し鳴き交わす
水鳥たちを思い出す

つい昨日のことだが
そのわたしの記憶は
どこからくるのだろう

たしかに
風はまだ冷たいが
春の空は青く
水鳥たちは
北へと帰る前に
河口を埋めていた
はずで

その記憶は
たしかにあるのだが
もう写真でしか
確かめることはできない

わたしの記憶は
どのように生まれ
どのように作りかえられ
どのように再生されているのだろう

わたしがわたしであることも
その多くは記憶でできている
ともいえるのだが

それらの記憶が
こうして再生されるとき
それらがほんとうであるのかどうか
ときにわからなくなる

わたしという記憶
わたしがわたしであること
そんなみんな

☆photopos-2766　　2022.4.4

※愛媛県久万高原町・面河渓にて

おしゃべりはやめて
耳をすます

世界はこんなにも
語りかけているから

そのことばを
たしかにききとるために

わたしたちの
内なる弦を調律する

与えられた仕方でも
教えられた仕方でもなく

おのずと奏でることのできる
そんな響きを受けとれるように

そして沈黙という器に
ほんとうのことばが注がれるように

☆photopos-2767　　2022.4.5

※愛媛県久万高原町・面河渓にて

それは何か
と問うてみる

それはこうだ
と答えてみる

けれど答えは
すぐに問い返される

見られたものは
意味を求めるが

意味はすぐに
別の意味に置き換わる

けれどその繰り返しのなかで
問いは見えない中心を獲得する

中心とは
すべての問いの中心であり

問うことで
中心もまた変わりつづける

そして変わりつづけながら
変わらないなにかが見えてくる

☆photopos-2768　　2022.4.6

※愛媛県久万高原町・面河渓にて

手をつなごう

わたしの
なかの
あなたと

あなたの
なかの
わたしと

らんらら
ららら

足をそろえて

わたしの
なかの
あなたと

あなたの
なかの
わたしと

るんるる
るるる

語りあおう

わたしの
なかの
あなたが語り

あなたの
なかの
わたしが語り

言葉と言葉
ららららら

声をあわせて

わたしの
なかの
あなたが歌い

あなたの
なかの
わたしが歌い

歌声はずむ
るるるるる

☆photopos-2769　　2022.4.7

※愛媛県久万高原町・面河渓にて

壁がある

敵から守るために
つくりあげられた強固な壁だ

いまや
自分を閉じるための
過去の壁にすぎないから

壁はやがて
壊されねばならない
敵という幻影から自由になるために

外から力で壊されるか
それとも内なる力で
壁の幻影に気づくか

世界は
壁に満ちている

世界は壁をつくり
壁は世界を守ろうとする

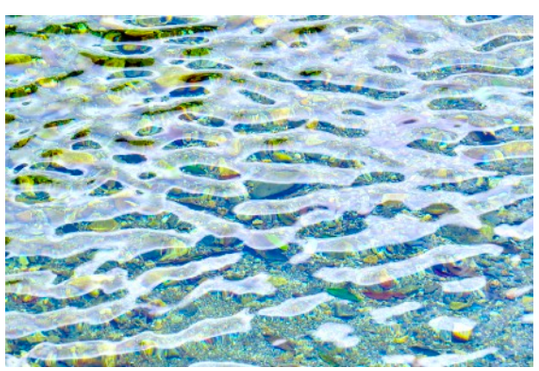
ひとつ壁が壊されても
また新たな壁がつくられる

壁の内には
深く刻まれた悲しみがあり
壁の外には
言い知れぬ恐れがある

壁がある

わたしは
わたしという壁に
向かわねばならない

☆photopos-2770　　2022.4.8



※愛媛県久万高原町・面河渓にて

過去へは帰らない
もう帰ることはできない

未来へは行かない
まだ行くことはできない

わたしは現在にいる
けれど現在には縛られない

いま・ここは
ただひらかれている

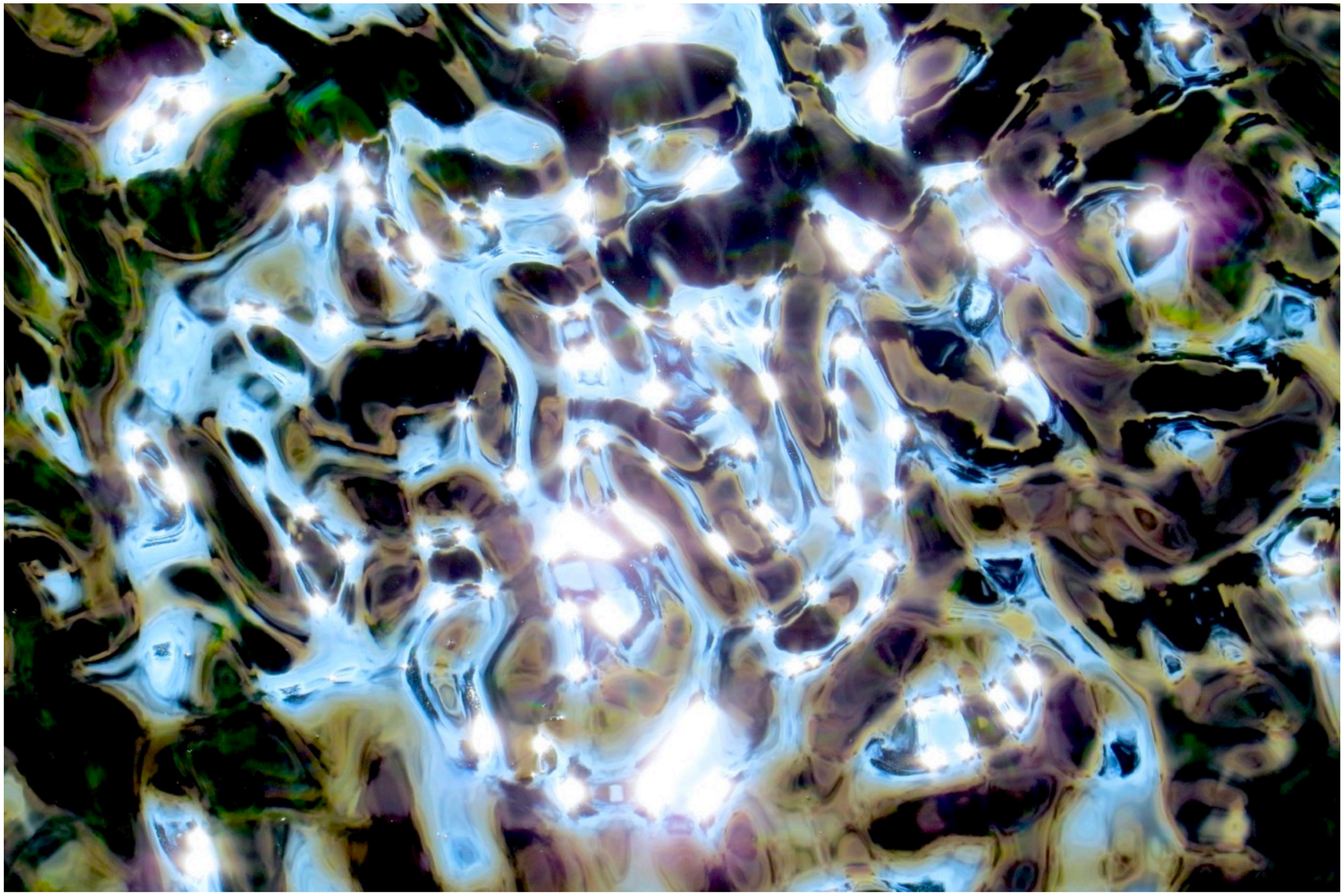
与えられた答えはない
ただ問いだけが生まれている

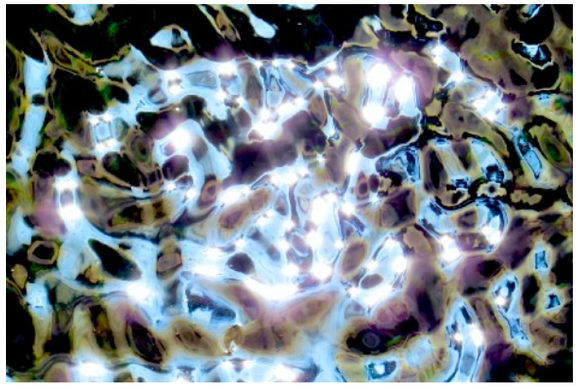
べきは失われている
決められたものなどない

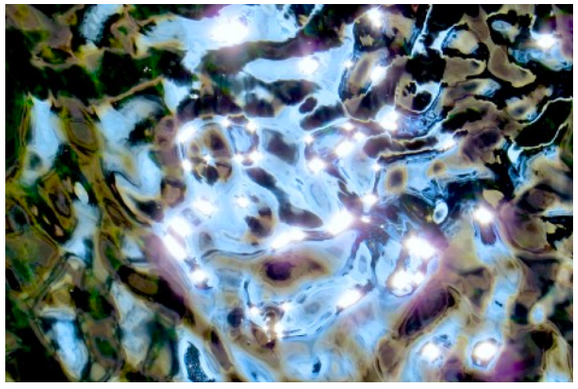
意味から自由でいる
意味はこれから創りはじめる

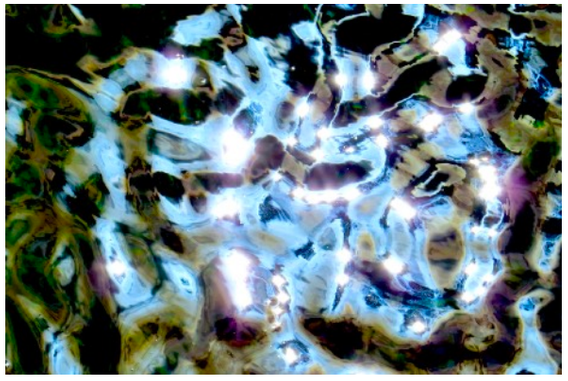
ただひらかれた
いま・ここにいる

☆photopos-2771　　2022.4.9









※愛媛県久万高原町・面河渓にて

わたしたちは
小さな灯火を掲げて
見えるところだけをたよりに
闇夜を歩くように

目や耳や鼻や舌や
体や心などを使いながら
世界という謎を
たよりなく生きている

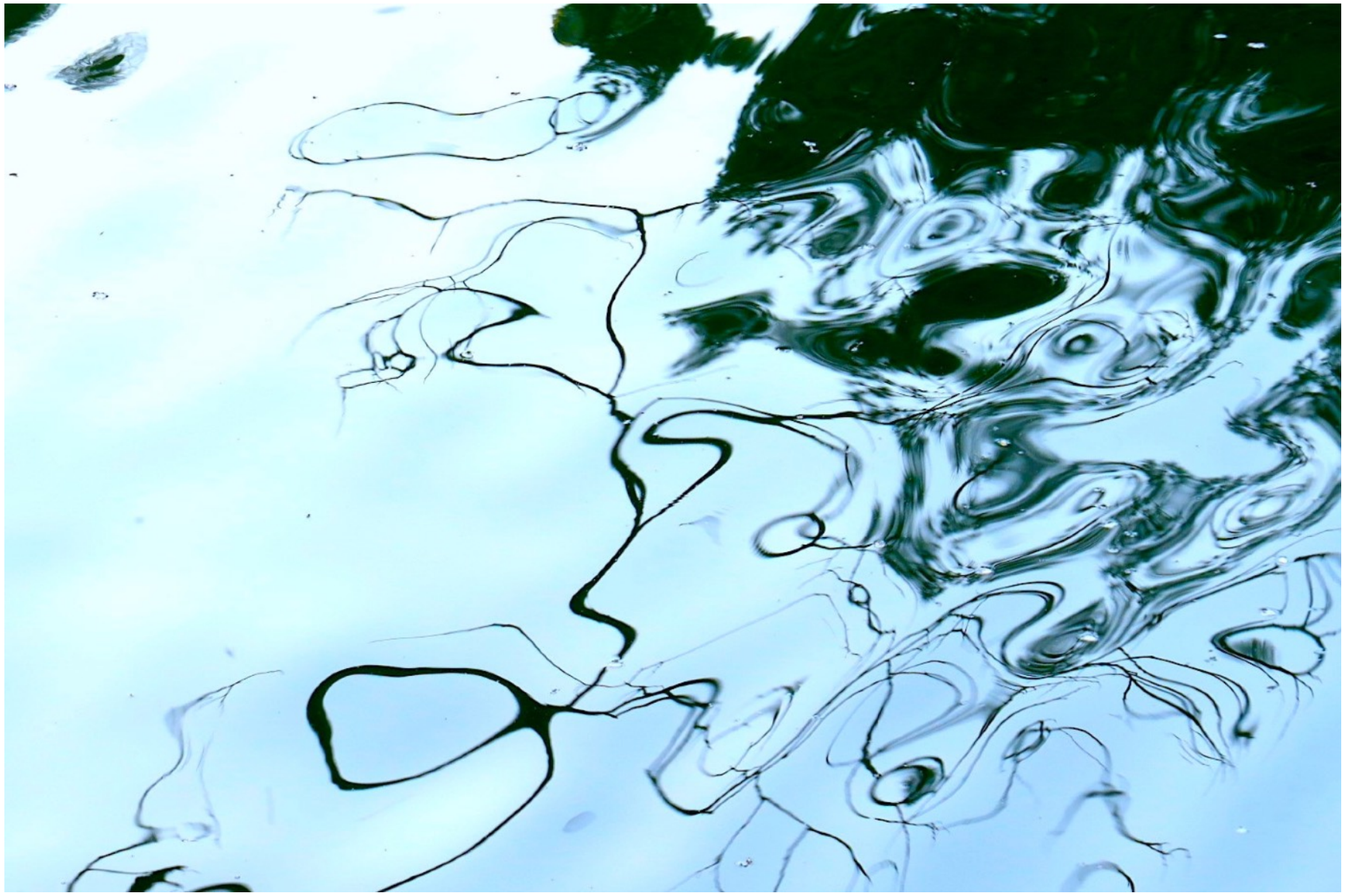
ある者は
これこそ確かな道だと
導く者がいれば身を寄せ
その示す道を信じ歩み
ときに裏切られ

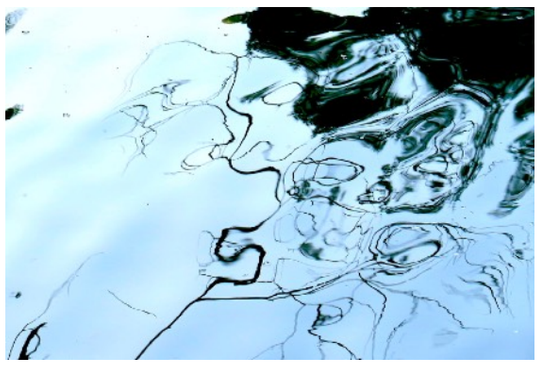
ある者は
ひとつ知りえたと思えば
知りえたことに縋り
知りえた世界に棲みつき
ときに棲み家を変え

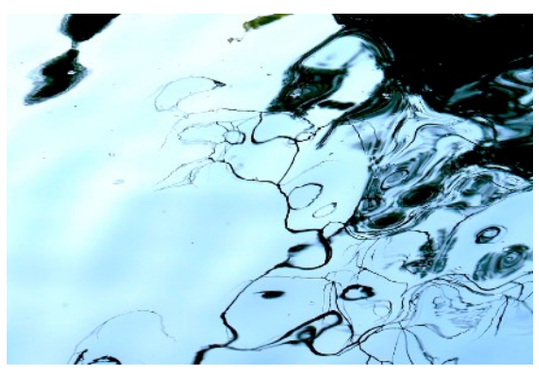
ある者は
ひとつ知ることで
むしろ知らないことに気づき
さらに問いつづけ
よろよろと道をゆき

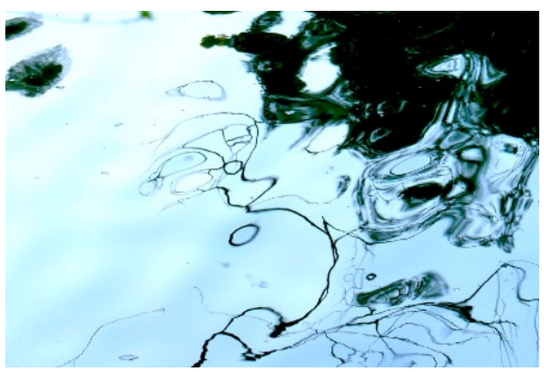
どこまでも謎のように
さまざまな姿で立ち現れる世界を
わたしという謎とともに
どこまで歩いてゆけばいいのか
それさえ知らぬままに

☆photopos-2772　　2022.4.10









ゆめとうつつが
とけあうように
みずとひかりは
たがいをうつし

うつしうつされ
せかいはうたい

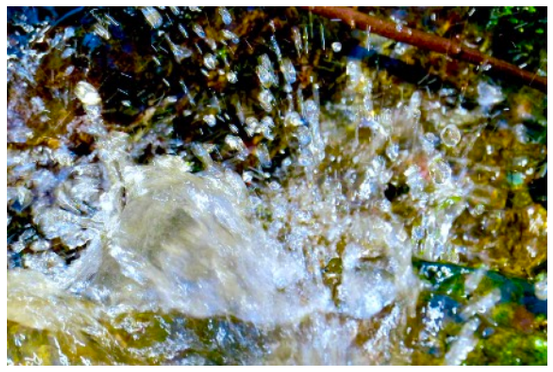
わたしとあなた
とけあうように
こころとからだ
たがいをうつし

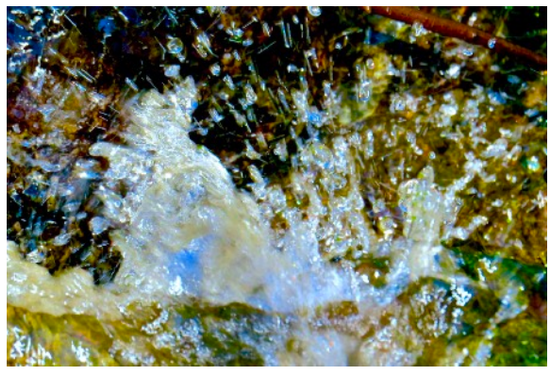
うつしうつされ
せかいはおどり

かことみらいが
とけあうように
ときとえいえん
たがいをうつし

うつしうつされ
せかいはめぐり

☆photopos-2773　　2022.4.11





※愛媛県内子町・小田深山渓谷にて

名は
じぶんを
ひとつに
閉じ込めるから
名なしでいる

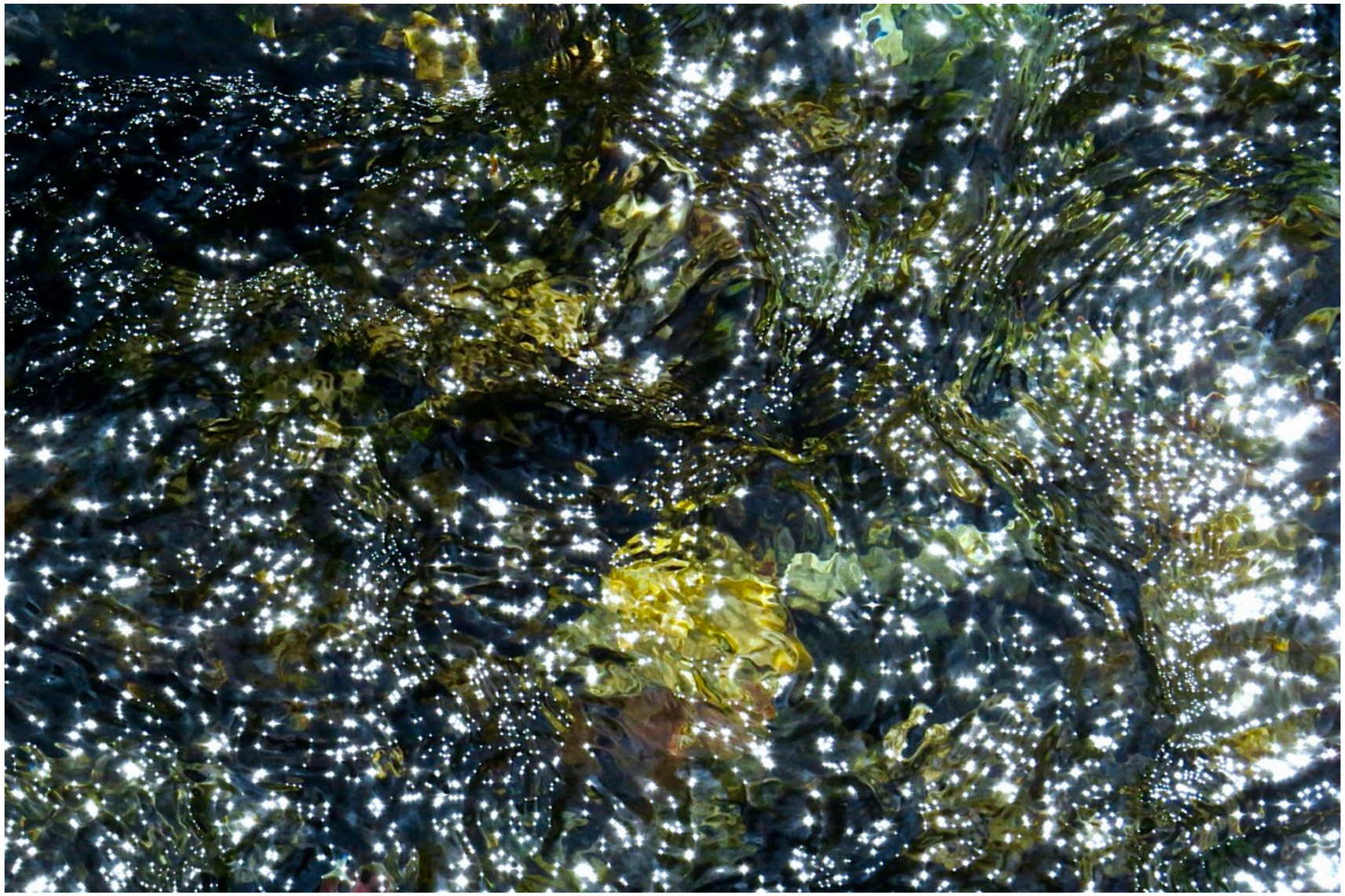
ひとは
だれかに
なろうとして
そのだれかのなかに
閉じ込められてしまう

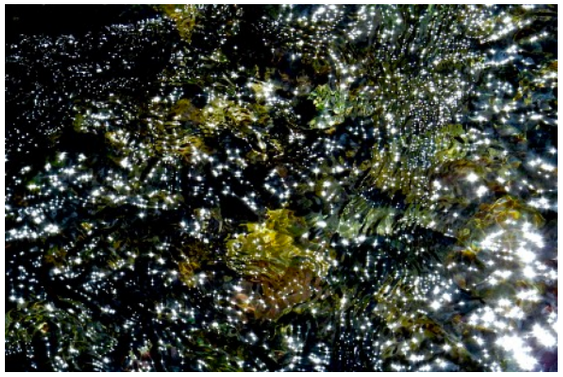
だれでもない
じぶんでいれば
だれもわたしを
名に閉じ込めることはできない

いちど名なしになれば
たとえ名を得たとしても
わたしはその名の
なかにはいないから
名に縛られることはない

わたしは名ではないから
名から自由でいられる
そして名なしだからこそ
名に遊ぶこともできる

☆photopos-2774　　2022.4.12





※愛媛県内子町・小田深山渓谷にて

ただ
いる

無為でいる

なにもしないのではない
生きている
呼吸している
遊んでいる

為すことを
しないだけだ
為すときにも
為さないことで為す

無為でいるためにと
ために
があると
もう
無為ではなくなる

わたし
が
となると
無為は
姿を消す

ただ
いる

ただ
ほど
むずかしいことはない

けれど
ほんとうは
なによりもやさしい

ただ
いる

宇宙が
ただ
遊ぶ
ように

☆photopos-2775　　2022.4.13

※愛媛県久万高原町・面河渓にて

ひとりでいても
ひとりではないとき
孤独は生きられない

心の湖面は
千々に乱れ
じぶんの姿は
見えなくなってしまう

ひとのなかにいても
ひとりになれたとき
孤独は生きられる

心の湖面には
風さえなく
鏡となって
すべてを映す

そして
やがてそこには
わたしさえいなくなる